

人文知の再生に向けて

伊 東 利 勝

2015年4月愛知大学人文社会学研究所が新設された。新たにといっても、1949年に開設された愛知大学文学会を改組・発展させたものである。文学・史学・哲学の研究及び発表を行う場としての文学会の精神を受け継ぎ、基礎研究を中心とする研究機関として生まれかわった。

内外の研究者を組織し、科学技術の進展と経済システムの高度化に伴い、地球規模で生じているより根源的かつ普遍的な問題に取り組み、新しい知の在り処をもとめ、地域や世界に向けてこれを発信していくことになる。

基礎研究を定義することは、なかなか難しいが、例えば、「豊かさ」とは何か、その内容を研究することは、これにあたるだろう。一方どうしたら「豊かになる」か、その方策に関する研究は、応用研究といってよい。

同様に「人権」とは何かというのは、基礎研究の仕事で、「人権を擁護する」にはどうすればよいのか、そのためにはどのような取り決め必要か、そしてこれをどのように運用するか、などは応用研究となる。さらには何をもって「開発」、「進歩」、「発展」とみなすかは基礎研究の領域で、「町づくり」だとか、「地域活性化の施策」研究は後者にあたるだろう。

もちろん基礎研究と応用研究は、截然と区分できるものではない。「豊かさ」や「人権」の内容も、どうしたら「豊かになる」か、どのようにして「人権を擁護する」か、ということの関連でしか考えることができないからである。

それでもやはり、「豊かさ」とは何か、「人権」とは何か、何をもって「開発」とするのかは、きちんと考えておかないと、応用研究がぐらつく。いろいろな方策を考える過程で、どれを選択するかという場面になると、その理念に立ち返らざるをえないからである。

ところでこの「豊かさ」とか、「人権」とか、「開発」とかいう概念は、絶対的なものではない。他者や取り巻く自然環境との関係で決まる、きわめて相対的な概念である。つまり、人によってその内容は、一様でない。社会によって、時代によっても、それをはかるものさしは、違う。誰にでも共通な「豊かさ」とか、「人権」とかの基準など、極論すればそのようなものはない。

しかし、これがバラバラでは、共同生活は成り立たないし、個人の生存も不可能に近い。ある程度の取り決めのもと、共通する尺度を作り上げようとする「力」が働く。これを法によって定める場合もあるし、道徳とか倫理というレベルでの対応も迫られてきた。

近代以降において、その「力」の根源にあるものは、国民国家体制であるといってよい。国民国家は19世紀になって世

界中に広がった国家形態で、現在この地球上を隙間なく覆っている。前近代の国王にかわって住民が主権者になり、彼らそして彼女らによって選ばれた人が国家を運営する。国境によって囲まれた土地を媒介に、国民（nation）とか、民族（nation）という運命共同体がそこに形成されてきた。

そのメンバーは限りなく平等である。誰が支配階級で、誰がそうでないかの区別があってはならない。一時は指導者になったり、行政に携わったりするが、そういう職から離れば普通の人になる。理念上は誰もが等しく、国家のあり方に責任をもつ。またその内側に、国家と並び立つ共同体の存在も認められない。

こうした、いわゆる市民社会の成立は、一方で社会の流動化をもたらし、人文社会に関する学問の誕生をうながした。社会学、歴史学、心理学、文学、言語学 など、中世には存在しなかった学問体系が生み出される。既存の哲学、神学、修辞学（詩学）にしても、近代における自然科学の成立により、その領域は大きく狭められ、新たな意味が付与されていく。新しい学問は、権威や権力の道具ではなく、市民社会を豊かにするためのものとなった。

主権が市民の手に移り、ネイション概念が成立するや、地球は国民国家をめぐる力のせめぎあいの場となっていった。国家は、互いにその独自性を主張し、内に向かっては統合、外に向かっては国益の守護神と化す。人文知は、そのために

生み出され、住民の国民化に寄与してきた。個別市民社会の動向や病理の発見は社会学や心理学が、ナショナル・アイデンティティの構築には、歴史学、文学、言語学が大きな役割を果たすことになる。

例えば、歴史学の場合、実証的客観的科学的に歴史を再構成する、となった。つまりあったものをも、忠実に再現するという。そのために主観を排し、歴史的事実を文書や物的証拠によって認定し、これを繋ぎ合わせ、歴史の流れなるものを「解明」する。我われの、もしくは彼らの社会が歩んできた道のりを、誰にでも納得いくようなかたちで構築していく。これが次々に書き換えられるのは、より真実に近づいているからであると理解されてきた。

しかしあることを描き出そうとする時、それにかかわる全ての史料を動員するわけではない。また歴史的事実にしても、重要度に応じて選別されてきた。例えば、西暦1600年の出来事といえば、イギリス東インド会社の設立や関ヶ原の戦いが取り上げられ、その内容や結果が描き出され、記憶される。

ところがこの年には、他にも諸種様ざま出来事が起きている。それこそ、この高師村で隣村とのいさかかが起こったとか。しかしそういう事件はマイナーなものとして、取り上げられることはない。選択の基準は、国家の動きとか、民族の命運にかかわる事件であったか、ということである。

無数に起きた、しかも連続している事象の一部を切り取り、

これをパーツとして、結局は「イギリス」や「日本」の来歴が描きだされる。きちんと批判された史料に、予断を排して、真っ白な心で向き合い、これに即して描き出すというのが、そこで解明された事実はイギリス国民の歴史とか、日本の歴史というものを構成するためのものとなる。そしてイギリス人として誇りや日本人の国民性などという考え方の根拠を提供していく。

これは歴史学に限らない。文学でも、社会学でも、心理学でも、いわゆる人文知というものはそういう制約をおのずと受けている。このことに無自覚であるとか、真理であるとか、客観的な事実であるとか、中立的な考え方であるとしても、「国民化のプロジェクト」の一環を担うことになってしまう。

その国民の特色であるとか、国家の繁栄であるとか、国民の統合というものに、人文知は貢献し利用されてきたのである。もちろん、日本国民の誇りを形成するための歴史の探求であるという自覚のものに、これを行うことについて異論はない。問題は、こうしたメカニズムに無自覚なまま、真理の追究、客観的な事実の解明を表明してはばからないことである。

人文学は、学問の自由のもと、真・善・美を追求するというのが、その目的についてはあまり議論されなかった。国民国家という形態は、相対化されることなく、空気のような存在であったからである。また「真理」という言葉がその政治性

を覆いかくしてきたともいえる。

現在の人文学に関するディシプリンや領域とされる、フランス文学、ドイツ文学、日本文学、あるいは日本史、各国史の寄せ集めである西洋史とかアジア史などは、民族文化や伝統や来歴の「発見」や確認を通して、住民の統合や、国民意識の形成に貢献してきた。人文学は社会の役に立たないとよく言われるが、これほど国家の存立に寄与しているものはない。

くり返すが、学問的営為は、その自由と中立性を金科玉条とし、個性記述につとめてきた。人間社会における「真理」の追究といってもよい。しかしそのことが、自らの立場を不問にし、誕生時に焼き付けられた刻印に思いをめぐらすことはなかった。人文知の存在理由についてあまりにも無自覚であったため、国家や民族の形成に奉仕し、その暴走に、何ら歯止めをかけることができず、今にいたっている。

自由・人権・平等など、これは人間にとって普遍的でかけがえのないものであると、だれしも認めている。しかし、この精神は国境を超えることはない。国内での殺人は、それが未遂であっても大変な問題となるが、他国他民族との戦争状態の中では、一人より二人、二人よりも三人、十人、百人となったほうが評価される。

自国の、自民族の維持・繁栄のためには、何をしてもよいのである。ここでは人権だとか自由・平等などというものまっ

たく通用しない。自由・平等・博愛思想が発達したとされるヨーロッパ諸国がアジア・アフリカで何をしてきたか／しているかをみれば、このことは明白である。つまり同じ国民、民族の中だけでしか、こうした普遍原理は通用しない。

これを克服する知というのはどういうものか。自由・人権・平等などは、どうすれば国境を越えることができるか。ネーションの身体化は、グローバリゼーションの動きに対しても、内向の力に拍車をかけ、社会を引き裂いている。民族や人種のために構築された19世紀的の学問を超える知とは。いま自分を読み、未来を切り開くための新しい学問の体系が求められている。

本書は、以上のような問題提起のもと、2015年6月27日愛知大学豊橋校舎で開催された、愛知大学人社会学研究所開設記念シンポジウムでの報告に基づいて執筆された論考によって編まれている。パネリストとして、哲学、社会学、心理学、歴史学、文学、言語学の分野からそれぞれ登場していただき、個別具体的事例に即し、それぞれ専門とする領域からの意見が述べられた。

もちろん、人文知の現状に対する、こうしたきわめてクリティカルな観点からの提起が、パネリストによって共有されていたわけではない。ここには、国境に縛られない人文知という考え方を鏡としたときの、論者それぞれの立場や学問状

況が映し出されていといったほうがよいかも知れない。そういう意味で、トランスナショナルな思想の構築に向けて、人文学やその研究に従事する研究者の現状が示されていると
いってよかろう。

現代における人文知を相対化し、未来を切り開くための学問とするため、どのような一歩を踏み出すのか、それを考える起点としていただければ幸いである。